共通経験や認識の上で お互いの考えを説明し合い 考えを更新していく活動

岩崎　誠

1　条件設定に当たって

研究テーマである『であう・つながる・うまれるコミュニケーション』を受けて，個人テーマを『共通経験や認識の上で お互いの考えを説明し合い 考えを更新していく活動』と設定した。この個人テーマに到るための条件設定を説明するために，テーマを区切り，それぞれの意図するものについて以下に示すことにする。

まず，「共通経験や認識の上で」について考える。子どもは，思考を働かせる課題にであったとしても，考えるための材料が十分でなければ，自分の考えをもつことはできない。また，経験のある一部の者の考えで話し合いを行ったとしても，クラス全員では話がつながらず，一部の者の深まりではクラス全員での学びにはならない。したがって，思考を働かせるための共通の材料として，クラスで共通に経験したことや認識したことをもとにして，思考を働かせるような課題にであうことで，クラスやグループなどの話し合いにつながりが生まれ，考えが深まり，クラスでの学びにつながっていくと考える。

次に，「お互いの考えを説明し合い」について考える。ここでは，子どもが課題に対して，目的をもって自分の考えたことを友達と説明し合うことで，自分の考えをより深めていくことをねらっている。そのためには，子どもがただ自分の考えを話すのではなく，自分の考えを相手に分かってもらうために，目的意識や相手意識をもって説明することが大事である。目的意識や相手意識に基づき，子どもが必要感をもって，考えを選択しよりよい表現をすることで，より自分の考えが相手に伝わったり，はっきり分かったりするであろう。また，一方的な説明ではなく，説明し合うことで子ども同士の考えの共通点や差異点が明らかになり，子ども自身の考えの強化や拡張につながる。

さらに，「考えを更新していく」について考える。「共通経験や認識の上で お互いの考えを説明し合う」ことによって，お互いの考えにおける共通点や差異点が見つかっていくであろう。しかし，それらの共通点や差異点が見つかるだけでは，人の考えは千差万別だと分かるだけで終わってしまう。それらの共通点や差異点について，さらに話し合いを深め自分の考えにいかしていこうとすることが，自分の考えを更新していくことになると考える。

このような『共通経験や認識の上で お互いの考えを説明し合い 考えを更新していく活動』を繰り返すことが，思考力・判断力・表現力につながっていくのではないかと考え，本テーマを設定した。そして，本テーマを成立させるために以下のような条件を設定した。

- **条件Ａ　共通経験や結果　認識の上で話し合っている**
- **条件Ｂ　目的意識や相手意識をもってお互いの考えを説明し合っている**
- **条件Ｃ　お互いの共通点差異点から　自分の考えにいかしている**

2　条件について

・条件Ａ　共通経験や結果，認識の上で話し合っている

課題によって子どもが意欲的になったり，個の中で思考があったりしても，共通の経験や結果，認識などの話し合いの土台になるものがなければ，話し合いは成立せず，考えの交流にもつながらない。そこで，課題解決の材料となる共通経験や結果，認識をクラス全員で共有することによって，課題に対するペアやグループ，クラス全員での話し合いが成立し，考えの交流につながっていくと考える。

・条件Ｂ　目的意識や相手意識をもってお互いの考えを説明し合っている

共通経験や結果，認識という土台がそろうことで，次によりよい話し合いに必要となってくるのが，目的意識や相手意識をもってお互いの考えを説明し合うことである。やらされるのではなく子どもが明確な目的意識をもち，相手意識をもって分かりやすく説明し合う姿になることで，よりよい話し合いとなり，最終的に子ども一人一人の思考に深まりがうまれると考える。

・条件Ｃ　お互いの共通点差異点から 自分の考えにいかしている

条件Ａと条件Ｂから自分の考えと友達の考えを比べることで，共通点や差異点を見つけていけると思われる。共通点は，自分の考えと同じ考えや似た考えとして，自分の考えの強化につながる。

一方，差異点は，自分の考えと違う考えとして，自分の考えに付け加えたり，友達の考えに乗り換えたりする。逆に違う考えと分かったが自分の考えのほうが課題に即していると判断すれば，対立が起こる。いずれの場合も自分の考えにいかしていこうとする気持ちがあれば，さらなる話し合いがうまれ，考えの更新につながっていくと考える。

３　おもな実践

条件Ａ，Ｂ，Ｃについて，１学期に様々な教科の授業場面において条件に到るような手だてを行ってきた。以下に，それぞれの条件において行ってきた手だてを授業の実際を通して述べていく。

・条件Ａ　共通経験や結果，認識の上で話し合っている

条件Ａのためには，共通経験や結果，認識の上で課題を提示して話し合うことが重要になると考える。つまり，共通認識をする場をつくり，その共通認識をもとにした課題について話し合う場を設けるという授業展開を工夫することで，共通した土台の上での話し合いができるのではないかと考え，以下のように実践を行った。

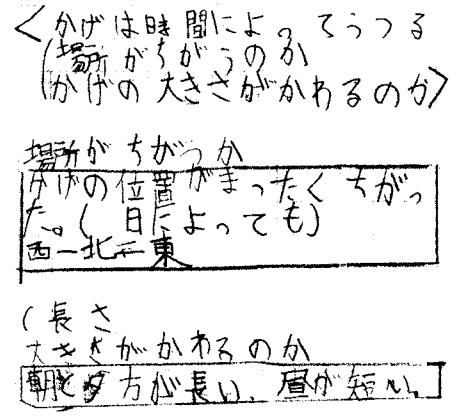
理科の単元「太陽とかげのようす」において，＜かげは時間によって動いたり大きさが変わったりするのか＞を，前時に観察したかげの１日の動きの記録をもとに話し合った。２時間分の内容だったが，２時間に分けて時間を空けてしまうと，１時間目で共通認識したことについて，２時間目の話し合いで認識のずれが生じることがある。そこで，すぐに思考がつながるように，１時間の中で授業展開を工夫することにした。授業の実際では，前半にかげの１日の記録から＜かげは時間によって動いたり大きさが変わったりするのか＞という前時からの事実を問う課題を調べた。この課題に対して，かげの動きは西→北→東の順に動く，かげの大きさは朝や夕方は長く昼は短いという事実を，クラスで最終的にまとめ，共通認識することができた（資料１）。後半では，本時の前半の課題を利用して＜なぜかげは動くのか＞＜なぜかげは大きさが変わるのか＞というように，「なぜ？」と言葉をつけて子どもに課題を提示した。すると，子どもは全員が自分の考えをノートにかくことができ，グループでの話し合いも盛んに行われていた（資料２）。このことから，前半に事実を問い，後半に「なぜ？」という言葉をつけて考えを問う授業構成は，前半の事実認識を利用して考えることができる点において，有効であったように思われる。

この授業構成は，英語の授業で Can you を使ってスポーツができるかどうか尋ねる単元においても用いた。

あるスポーツができるかどうか尋ねるときには，

Can you do kendo?
Can you play baseball?
Can you swim?

の３種類の言い方がある。スポーツごとに言い方を予想しながら，スポーツ名のカードを言い方のグループに分けて黒板にはっていくことで，グループ分けについて共通認識をもてるようにしていった。子どもは最初どこにはるのか分からなかったが，はっていくうちに予想が立てられるようになっていった。終盤では「バレーボールはどこにはるのかな」「なぜバレーボールはそこになるのかな」と問いかけると「ボールを使っているグループだから」のように答えることによって，クラスとして共通認識がもてた。



資料１　子どもが共通認識したこと

資料２　グループでの話し合い

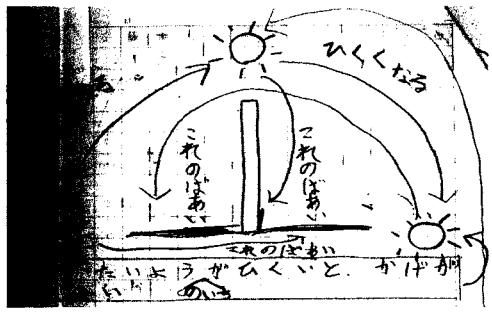
いろいろなスポーツのグループ分けをして共通認識がもてた上で，子どもに「３種類のスポーツの分け方はどんなわけ方になっているのかな」と問うと子どもはグループでの話し合いから「日本でうまれたスポーツと，ボールを使ったスポーツと，それ以外のスポーツに分けられそうだ」というように３年生なりの考えで答えることができた。やはり，共通認識の上で，考えを問う授業構成が有効であると考える。

・条件Ｂ　目的意識や相手意識をもってお互いの考えを説明し合っている

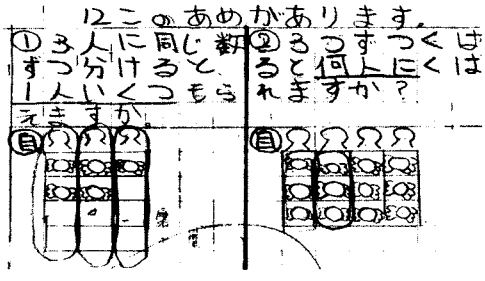
条件Ｂのために，授業でのペアやグループでの話し合いはもちろんのこと，異学年交流や行事等の発表でも，目的意識や相手意識をもたせるようにしている。また，相手に考えを分かってもらうには絵や図，表を利用することが有効である。言語だけでは伝わりにくい考えも，絵や図を用いて説明することで相手に理解してもらえると考え，絵や図，表などを授業に応じて利用している。以下に，条件Ｂに対する２つの手だてについて実践を紹介する。

(1)　相手に分かりやすく伝えるために絵や図を利用する

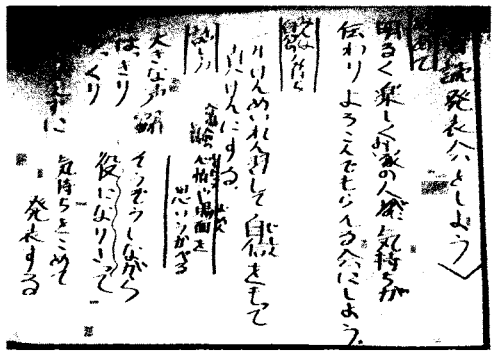
４月の当初から，相手に説明するときには，言葉だけでなく絵や図を使って説明すると相手に自分の考えが伝わりやすいということを伝えてきた。子どもは主に算数や理科の授業において，友達に説明するときにノートに図や絵をかいて説明する経験を積んできた。また，説明するときには黒板を自由に使わせ，絵や図を利用しながら言葉で自分の考えを説明する雰囲気をクラスの中で作ってきた。



資料３　絵や図を利用した説明



資料４　黒板にかいた図と同じノート



資料５　相手意識をもった単元計画

その結果，条件Ａにおいて紹介した理科の授業実践の中で，相手に分かりやすく伝えるために絵や図を利用する姿が見られた。子どもは，自分の頭で考えたことをノートに図で表して，グループの人に見せながらかげの動く理由やかげの大きさがかわる理由を説明していた（資料３）。グループで説明し合う中では，グループの友達の説明を聞いて自分のノートの説明に付け加えている姿も見られた。算数科では，割り算の文章問題における等分除と包含除の違いを説明するときに，友達に「左のバラバラくん（等分除のこと）は，あめを３人に１つずつ配っていく分け方で，右のまとまりちゃん（包含除のこと）は，１人に３つずつ配っていく分け方です。だから２つは分け方が違うと思います。」という説明をしていた（資料４）。子どもはこの図をもとにした説明を聞いて大部分が理解を示していた。このように，絵や図を利用すると相手に分かりやすく伝えることができることは子どもの中で実感になりつつある。絵や図を利用して相手に分かりやすく伝えようとする意識が育っていると思われる。

(2)　目的意識や相手意識をもった発表会の設定

国語科の「きつつきの商売」では，最初の学習計画を立てる段階で，＜授業参観で音読発表会をしよう＞という活動課題を提示した（資料５）。お家の人に聞いてもらうことを前提に授業を行っていったので，子どもの意欲は高く，お家の人にどんな姿を見てもらったら喜んでもらえるのか，目的意識のもと真剣に考え取り組んでいた。その中で，よりよい音読をするために，グループで自然と話し合いが始まり，どんどん工夫をプラスしていった。この動きは音読発表会が終わっても続いた。目的意識をもって行ったふじだなおとぎ会にお

いても，よりよい詩の朗読のため声を合わせたり，動きをつけたりといった工夫が随所に見られるようになった。また，グループ同士で見合うために兄弟グループを設定し，お互いにいいところ悪いところを発表し合い，よりよいものにしていこうとする気持ちは最後まで高かった。

「おもしろいもの見つけた」では，２年生と交流することを前提に授業を進めてきた。子どもたちは２年生に伝わるように，まとまりごとに段落を変えたり，絵で示したりした。さらに，字の大きくきれいに書いたり，読み仮名をつけたり，意味を調べておいたりするなど相手意識をもって取り組み，グループでの見せ合いも活発に行われた。その結果，２年生との交流では，内容が伝わりたくさんの感想をもらうことができた（資料６）。このように，相手意識や目的意識を明確にもってグループ活動を行うと，グループでの話し合いが活性化され，より高い話し合いが展開していくことがわかった。

資料６　相手意識した異学年交流

・条件Ｃ　お互いの共通点差異点から 自分の考えにいかしている

条件Ｃのためには，まず，条件Ａ，Ｂを経て共通点や差異点が見つかることが必要である。その共通点や差異点をもとにさらに話し合う場を設けることで，自分の考えが強化，変容して考えを深めていけると考え，以下のような実践を行った。

国語科の「ありの行列」では，＜ありの行列ができるわけが どこの段落に書いてあるか＞を課題とした。子どもは，⑥か⑧か⑨段落かということで，まずは自分が選んだ理由をノートに書いてから話し合いを行った。これまでは，クラス全体で意見を出し合い，考えを収束してきた。今回は一人一人が自分の考えをもっていたので，まず，誰がどの段落を選んでいるか明確に分かるようにした後，クラスを動き回って考えを伝えたい人のところにいって話し合うようにした。一人一人が自分の考えを言う機会をもち，相手が自分と違う考えならば，お互いの差異点を焦点とする話し合いが行われ，相手が自分と同じ考えであれば，自分の考えの強化につながる話し合いが行われると考えた。その結果，課題の「行列ができるわけ」に注目して，教材文の「・・・わけです。」と書いてあることに着目した子どもがいて，話し合いをしていく中で考えが淘汰され最終的には⑨段落に収束していった。このように，お互いの考えを明確にして自分の考えを話し合いたい人と話すことで，お互いの考えが深まり，自分の考えにいかしていくことができることと分かった。

４　今後に向けて

条件Ａでは，共通経験や結果，認識の上で話し合いが行えるように，時間配分を考えていく必要があると感じた。１時間の授業においてクラス全員で共通認識した上で，「なぜ？」というような思考を促す発問を行うのは時間的に難しい。授業内容を精選して授業構成を工夫することが，条件Ａにとって必要である。また，課題に対する共通経験や結果，認識が少ないために，子どもが迷う場面も見られた。そこで，共通経験や結果，認識に沿った課題を考えたり，課題にあった共通経験や結果，認識などを用意したりする必要があると考える。

条件Ｂでは，わかりやすく伝えるために絵や図を利用する手だてを考えたが，相手に合わせた表現方法を選択する余地がなかったために，より相手に分かりやすい表現方法を選び，表現することが十分ではなかった。今後は，選択できるだけの表現方法を模索し，子どもに身につけてさせていきたい。

条件Ｃでは，自分の考えにいかしていくための手だてが弱いので，今後考えていく必要がある。例えば，振り返りを友達と共有する時間をとり，自分の考えの変容をより自覚できるような手だてをとったり，子どもと評価を共有して子どもの自己評価を充実していったりするなど，条件Ｃに到る手だてを探っていきたい。